

走馬燈

卷

特別
14
1919
163



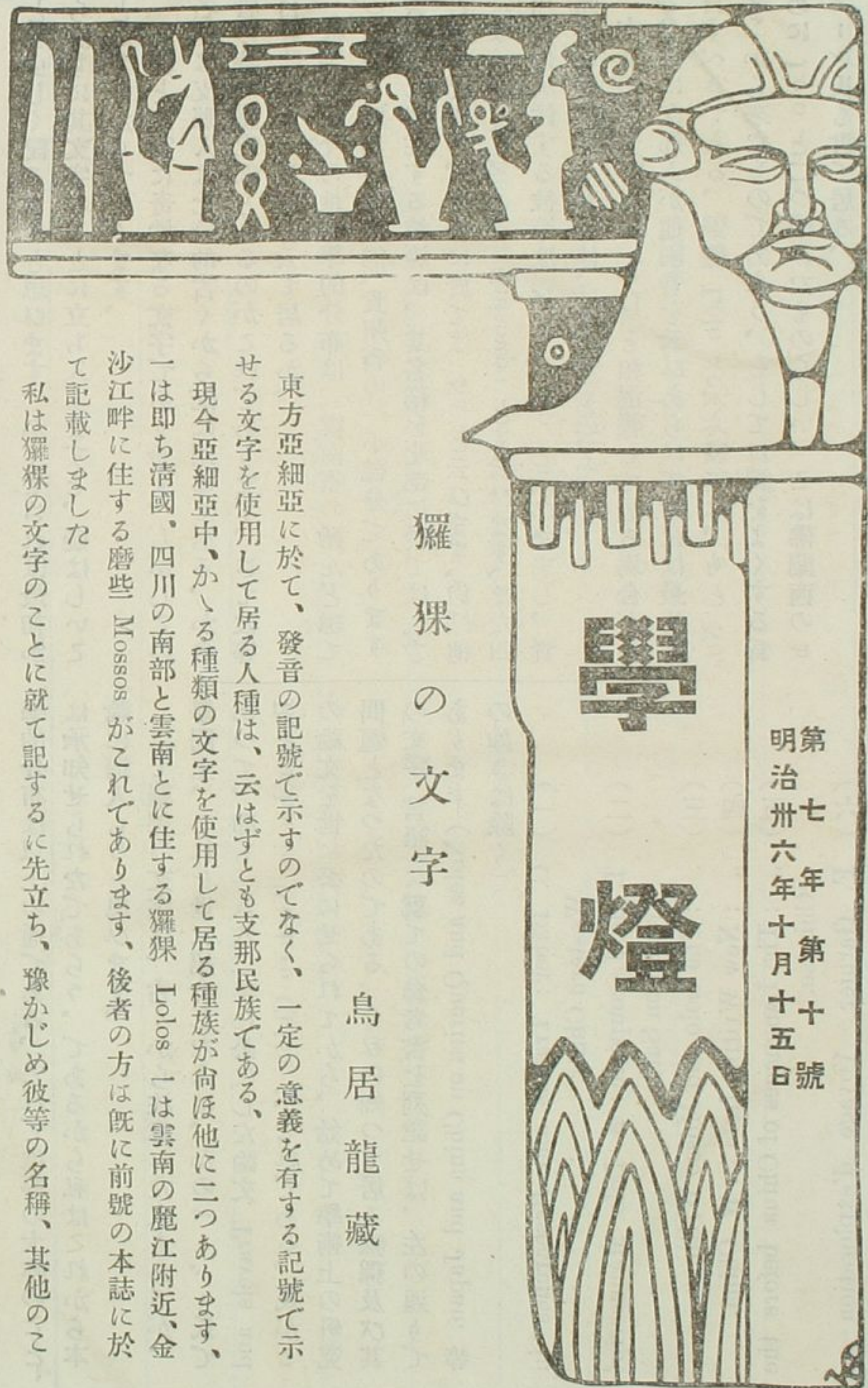
176440



Photo. by R. T. T. T.

清國四川省附理會近黑羅探婦及小女
東京帝國大學所藏鳥居龍藏氏攝影

38- 8962



羅裸の文字

鳥居龍藏

東方亞細亞に於て、發音の記號で示すのではなく、一定の意義を有する記號で示せる文字を使用して居る人種は、云はずとも支那民族である、
 現今亞細亞中、かゝる種類の文字を使用して居る種族が尙ほ他に二つあります、
 一は即ち清國、四川の南部と雲南とに住する羅裸 Lolo 一は雲南の麗江附近、金沙江畔に住する磨些 Mosos がこれであり、後者の方は既に前號の本誌に於て記載しました
 私は羅裸の文字のことに就て記するに先立ち、豫かじめ彼等の名稱、其他のこ

アイル氏も書て居る 彼等は右の如き名稱を有して居つて、そして其地理

アイル氏も書て居る 彼等は右の如き名稱を有して居つて、そして其地理

(六) F. Garnier: Voyage d'exploration en Indo-China.



獯 猓 の 文 字

鳥 居 龍 藏

東方亞細亞に於て、發音の記號で示すのでなく、一定の意義を有する記號で示せる文字を使用して居る人種は、云はずとも支那民族である、
 現今亞細亞中、かゝる種類の文字を使用して居る種族が尙ほ他に二つあります、
 一は即ち清國、四川の南部と雲南とに住する獯猓 Lolos 一は雲南の麗江附近、金沙江畔に住する磨些 Mosos がこれでありませう、後者の方は既に前號の本誌に於て記載しました

私は獯猓の文字のことに就て記するに先立ち、豫かじめ彼等の名稱、其他のこ

Handwritten text in a cursive script, likely representing the Mosos or Lolos script mentioned in the adjacent page. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines, with some characters appearing to be stylized pictographs or phonetic symbols. There are some faint markings and possibly numbers (like '22') interspersed within the lines.

字 文 の 獯 猓 黑 理 會 省 川 四
 寫 模 氏 居 鳥



とを少しく記るさんと思ひます、かくせされば最初から直ちに其文字のことに立ち入りますと、疑はしいことが多いからであります、

羅傑とは實に奇妙なる文字であります、しかしこの名稱は支那人は比較的古くから既に用ゐて居る、かの唐の時の盧鹿部とあるのがこれでありませう、さて彼等自身は自からを何と云て居るか、

彼等の現今の地理學的分布は、雲南省の殆んど總ての區域、四川省の南部、貴州省の一小部分であります、雲南省に居住する彼等は、其名稱を北部に於ては No. と云ひますし、南部に於ては Na. と云ひます、尚ほ他には Topou, Nesapa, Gnisoupo といふ名も、また四川省に居住するものは、Nusup といふ、

支那の發音では N と L と相混雜して居る場合がある、殊に支那人が他國音を云ひあらはす時には最も注目すべきである、羅傑 Lolo と云ふ發音は、もと No. Na. から來たものであらう、そして口調をよくする爲めに Lolo と二つ續けたものらしい、こは佛蘭西の P. Airl 氏も書て居る、

彼等は右の如き名稱を有して居つて、そして其地理

學的分布は以上の通である、これに彼等の大畧のことは承知せられたであらう、であるから私はこれから本論に這入らうと思ひます、

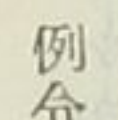
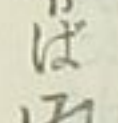
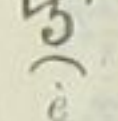

さて羅傑の文字は、古くから注意した人もあるが、學問上、これを世に紹介した人は、かのペーバー氏であつて、即ち一八八二年に公にした論文 "Travels and Researches in Western China." がこれである、氏がこの論文を世に公にせられてから、始めて學術上の研究問題となつたのである、今私の知つて居る羅傑及び其の文字(言語)に就ての参考書を列記せば、左の通りであります (Notes and Queries on China and Japan. 等の如きは除く)

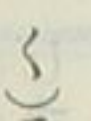
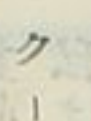
- (一) C. Baber: Travels and Researches in Western China.
- (二) P. de Lacouperie: A Lolo Manuscript written on Satin.
- (三) " : The Lolo and Mosso Writings.
- (四) " : New Writing from S. W. China.
- (五) " : The Languages of China before the Chinese.
- (六) F. Garnier: Voyage d'exploration en Indo-China.

先づ参考書は以上の通りで、私も今回四川、雲南、貴州の羅傑を調査し、其文字を聊か調査いたしました、私はこれから以上先輩の書たものと、私の自から調査しましたものとを相合し、記載せんと思ひます、

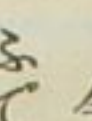
- (七) H. D'Orléan : From Tonkin to India.
- (八) G. Devéria : La Frontière Sino-Annamite.
- (九) " : Les Lolos et les Miao-tze.
- (一〇) E. Rocher : La Province chinoise du Yunnan.
- (一一) ED. Chavannes : Les memoires historiques du Se-matsien.
- (一二) L. Boell : La Langue Lolo.
- (一三) P. Vial : De la langue et de l'écriture indigènes au Yun-nan.
- (一四) " : Les Lolos.
- (一五) G. W. Clark : Kweichow and Yun-nan Province.
- (一六) " : Province of Yun-nan.
- (一七) H. Yule : Travels of Marco Polo.
- (一八) 讀雲南通志
- (一九) 滇繫
- (二〇) 南詔野史

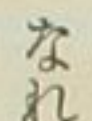

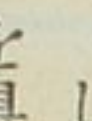
羅傑の文字は、彼等に接して居る支那民族の最初の象形文字や、今日尙ほ其ステージにある、かの磨些種族 Mossos の繪文字とよく類して居る、しかし羅傑の文字は、今日は純然たる象形でない、私は羅傑の文字と支那の最古の文字とを比較して見るに、其使用の點から云へば、支那文字の方よりも、羅傑の文字の方が進歩して居る、一昧支那の文字はもと象形で、主として物の形に因て作られたものであるから、其文字は大概は其實物の形を模して居る、又無形の文字であれば、多少其あらはし方は實物の形などから考へつけられて居る、されど羅傑の文字は左様ではない、少しは象形もあるが、其多くは實物の形状からでなく、實物に意味なきことから來て居る、私を以て見れば彼等の文字の形状の基礎は、簡單なる線、線、圓などから來て居つて、又これが相集められて、文字を形成して居るのである、佛蘭西のビアル氏は彼等の文字の百九十五の内、僅かなる取除けをしたならば、主としてこの形状から來て居るらしいと云はれた


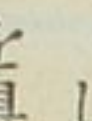
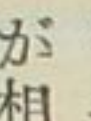
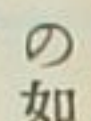











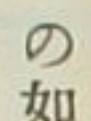











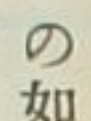











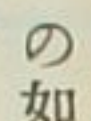











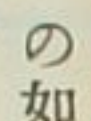











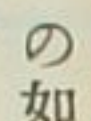











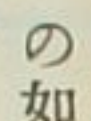











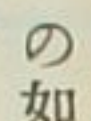











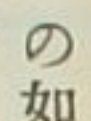











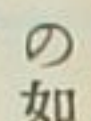











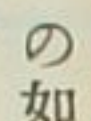











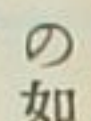











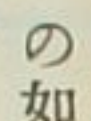











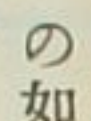











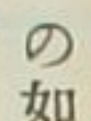











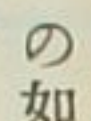











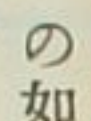











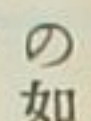











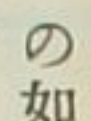











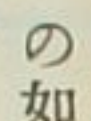











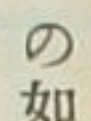











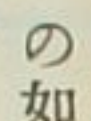











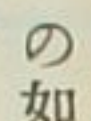











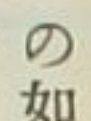











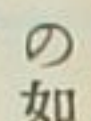











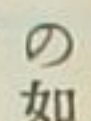











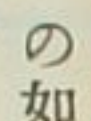











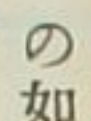











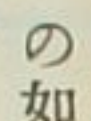











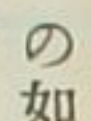











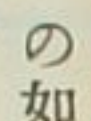








例令ば  (獵)  (息子)  (老人)  (全)

く)  (you 大きくなる) 等の様なのであります、またラクーベリ、氏も其文字の形状は  フ こんな様なものが基礎となつて居るらしいと云はれた

彼等の文字はアルファベットの音文字を組合せて一語を形成するのでない、一文字はすでに音と意味との二つを具備して居るのである、この點は支那文字と同じである、されば一文字に各々それの一定したる發音と意味を合て居るから、かのアルファベットの文字の様に容易く習得することは出來ぬ、これを知るには幾多の歳月と、勞力、勉強を費さねばならぬのである、私はこの文字の程度より云へば、實に彼等に不似合の文字と云はねばなりません、

今其一例を挙げますれば、先づ山と云ふ羅傑字はどふであるかと云へば、其文字は  である、また天

なれば  地  食  でありませぬ、持つと云ふ字なれば

  斯くの如くは  私  熟練する  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也  也

可種卑濕命后稷。予衆庶難得之食。食少。調有餘相給。以均諸侯。禹乃行相地宜所有以貢。及山川之便利。禹行自冀州始。冀州既載。壺口治梁及岐。既修太原。至干嶽陽。賈懷致功。至於衡漳。これて兎に角其洪水の始未がよく解せらる。

さて以上の洪水談は、實際太古に在つたことであるか如何、私はこの話を支那民族の古くから傳ふる、神話的口碑であつて、堯、舜、禹、禹のことは所謂 Semi-Mythical Period と考へて居る。

洪水の太古にあつたと云ふ口碑は、あながち支那民族のみではない、他にも多くかゝる話が傳つて居る、中にも最も著しきものは、かの舊約聖書中に書てあるノアの洪水の話と、メソポタミア地方イッパル歌中にある洪水の話とがこれである、支那の洪水の話も事實として有り得べきことである、何となれば支那民族の古く居住なし居れる黄河の河畔は今日と云へとも、或關係から洪水を來すことがありますが、太古かゝる洪水の最も大なるものがあつたことを傳へて居るのかも知れん、これを全く事實でないとしても、かゝる洪水談の支那民族の古傳中に存在するは吾人の最も注目すべきことでありまじやう。

これに就て思ひ當るは、かの羅傑の洪水談であります、彼等の神話によれば、一時甚しき乾燥時代があつた、其れに次で、洪水時代が來た、其時四人の兄弟(三人男、末一人女)があつて、この洪水の來ることを前知し、最上の兄は鐵の箱の中に入り、次は銅の箱の中に入り、第三の弟と、其妹はともに木の箱の中に這入りました、然るに第一、第二の兄弟は水に侵され、末の弟と妹とは幸ひに洪水の難を免るを得ました、これに付てこんな話がある、始め弟と妹の二人は木の箱の中に這入る時、鶏の玉子を持つて這入つた、そして雞鶏がうたはぬ間は決して箱の戸を開ける勿れ、雞鶏が鳴くや、直ちに箱の戸を開くべしと命ぜられたのである、彼等はかくの如くして Moukon 山の中腹の岩の樫の木の上に留まつた、水浸し來り、竹の枝に縋付て岩上に達した云々、

私はこの神話は元同一の所から出た話であるか、又別々に起つた話であるか、これは今後諸君とともに研究すべき一大問題であらうと思ふ。

ラクーベリー氏 (The Languages of China before the China.) に據れば言語學上から云へば、かのブラマプッタ河畔の Nagas や、雲南の磨些 Mosos や、力些 Lisos は羅傑と同一系統の下にあるものである、そして支那の歴史に古くから出て居る、所謂戎 Tung なるものはこの又系統に屬す可きものである、戎は早くから支那に侵入し、其地理學的的位置は支那の東北、西藏の東部にまで達して居つた、この時代は恐くは支那民族のやゝ開明に進みたる Pale (百) 種族の中華の土地に移住したる前後の頃でしやう、デマント氏は久しく西部ナガ種族を調査せられた人であるが、氏によれば (Notes on the Locality and Population of the Tribes dwelling between the Bramaputra and Nilgiri Rivers.) ナガの其種族名は Mas, Jemi, Yemi, Yang, Li-yang, Reng, Quoi-reng, と云つて居る、是等の名稱は戎の發音、及び其別名とよく類似して居る、この類似はまた羅傑に向ても大に注目すべきことでありまじやう。

私は何づれ別に精しく書く考であります、一昧支那民族が古く神話中にも云ひ、又土俗中にも盛に行はれて居る「龍」なるものは、人種學上最も注目すべきものであらう、この龍も羅傑の神話中に出て居る、そして其發音は Lou である、支那では龍の音は Lung である、果して然りとせば二者發音は等しい、かく龍なるもの、及び其發音の相類似せるは二者の關係のあることが知れます、もと龍なるものは羅傑から考へ出したものか、又支那民族が中心であるか、この研究も又吾人の研究すべきものであらう、

要するに、羅傑の固有の文字で書た神代記の研究は單に羅傑種族其ものゝみでなく、尙ほ支那民族の太古史の比較研究となるべきものである、私は支那民族を研究する上に向て併せて羅傑の研究をも共にせられんことを望みます。

尙ほ最後に於て云ふべきことは、羅傑の文字の起原である、羅傑は其居住地の雲南、四川と云はず、ともにこの文字を有して居る、私は最初支那の象形文字が彼等に傳はつたのではないかと考へて見て、互に比較して見たが、今日の所では充分一致しない、されば二者別々のものと云ふ方が先づ適當らしい、しかし茲に疑

ふ可きは羅傑は古くより支那民族と接して居つたから、知らず識らずの間に彼等が支那民族の文字を見習ひ、遂に一種のこれに類した文字を發明したのかも知れません、しかしこの事は未だ何とも云ふ可き材料を持つては居りません、たゞかく疑ふのみである、

唐代に於て今日の雲南から四川にかけて蠻族の一大王國が設立せられた、是れ即ちかの南詔 Nanzhao 王國であります、この王國は中々盛であつて、ともに支那民族の開化も這入て参りました、この時、羅傑の文字は少なくとも大に關係したてでありました、こは又大に研究を要することである、

よし羅傑の文字が直接支那文字から出ぬとしても、其文字の種類は等しく意義を示す記號でありますから、二者はともに研究すべき價があるものであります、殊に支那太古の象形文字の發達史研究としては最も必要であります

次に注目すべきは磨些の今も使用する文字である、この文字は中央アメリカに昔行はれた繪文字とよく似て居る、又これを支那の象形文字と比較對照いたしますに、まさしくこのステージにあるものであります、されば磨些種族の文字の研究は最も大切のものである

以上の如く記し來らば今日東亞に於て支那の文字を使用して居るものは支那民族、羅傑、磨些の三つでありませす、(本篇を記し終る際近著の英國人類學會雜誌 A. Henry: The Lolos and other tribes of western China. の文を引用し居ります、本稿中に入れる暇がなかつたから、残念ながら今こゝに引用せず、他日改めて記すこと、しやう)

本文を記し終て、安南のことを記せる『大越史記全書』を見たが、尚ほ『洪水』の神話様のものがある、こゝに其全文を掲げること、しやう

こは雄王の時で、其話はおくの通りである『時屬季世、王有女、曰媚娘、美而艶、蜀王聞之、詣王求爲婚、王欲從之、雄將止之曰、彼欲圖我、以婚爲由耳、蜀王以是脚怨、王求可配者、謂群臣曰、此女是僊種、才德兼備者、方可爲婚、時見二人自外來、拜見庭下、求爲婚姻、王異而問之、對曰、一爲山精、一爲水精、皆在境内、聞明王有聖女、取來請命、王曰、我有一女、豈得兩賢乎、乃約來日能具聘禮、先來即與、兩賢應諾、拜謝而歸、明日山精將珍寶金銀山禽野獸等物、來獻、王如約嫁之、山精迎回傘圓高峯居之、水精亦將財後至、恨悔不及、遂與雲作雨、激水漲溢、率水族追之、王與山精、張鐵網截慈廉上流以扞之、水精從別江、自荏仁入廣威山脚、綠岸上喝江口、出

大江、入陀江、擊傘圓、處々鑿爲淵爲潭、積水圖襲之、山精神化、呼得蠻人、編竹爲籬禦水、以弩射之、鱗介諸種、中箭避走、終莫能犯也俗傳、山精水精是後世傘圓乃我越巔山、其靈應最爲顯驗、媚娘既嫁山精、蜀王憤怒、囑其子孫、必滅文郎、而併其國、至孫蜀洋、有勇略、乃攻取之、

この洪水談は最も比較参考すべきものであらう、

○書林文のむ心 餘の方ほひ梵文を十二系考の出版
を心こそわ一正しう出せ、みる頁むらむらむ、内容を
聖カリーリダーサ作の教むシヤクシタラうひある、字
楠順治印が教むの一取とシヤクシタラうひある
すいを序言の古りそを、此考を觀る者も
すく、その文を見れば、あかの注脚う英文ひ附しあ
るり、其の、其の考、其の考、其の考、其の考、其の考、

著くは能読るべき之を著す英文の天竺記
も既して描きたるを以て著す能くしを著す
しとゆふ我々の物語るは三種の注意すべき
あり

(4) 悲劇の存せざる事 即ち我々の一般の
悲劇(ロマンチック)の属し多くは正義を以
てその骨子とするし、英エリザベス時代の作家
も概し、強さセーリクスピアの作る破似せるもの
多きはカリダーサの作る格なりと云う事。
の活動の範圍を居るく人々を著すに直に非
人交通の善悪を著し、その善悪の是非を著す

於その善性あるは別段よく如く主好む非
常に情話別を流離昇合を著す事あり。
つと多しと著す我々の小説は悲境の極む境
と云ふを均しく述べて悲境の境道を脱し幸福
なる境を以て終る事即ち此の境道を脱し終る
事也を言ふ事あり此の事ありと云ふ事あり
刻を困苦災害ある境あり終る事と云ふ事あり
是を以て人の心を分す事あり。是を以て
其の目的は終る事即ち此の境ありと云ふ事あり
ある事ある事終る事と云ふ事あり。是を以て

(1) 割中へ用えり韻文は悉く拵付傳りし
四一連のしり、二句一連のしり、一三連せりといふ
拵越えをよみて野原のしり、常の韻文を用
ひしり、シヤクニシラシ歌也、拵をよむ散文の
外、四句一連の拵付傳るは二連を合言ふ、大の
その脚元のしりといふ

(2) 梵法と方言とを並めていふこと 言語をいふ
人格をいふしりを用を笑し 梵法(サンスクリ
ット)とて人、國王、勇士、婆羅門、言者人の
しりを用いぬ、方言(アラビヤリット)と
世にありしり、人、しりを用いぬ

一 印子のしり、そのしり、要る綴帳等扱し
其のしり、しり、拵付をいふしり、但し、綴帳は
そのしり、後方、しり、之を以て、樂屋の扉
とす、しり、如く、役者、しり、役助、しり、この
綴帳と排し、しり、しり、しり、其のしり、
左のしり、は、しり、しり、しり、しり、

一 其のしり、(1) 式、(2) 式、(3) 式、
其のしり、しり、しり、しり、其のしり、
しり、しり、しり、しり、しり、
しり

くまの政海の如く宣旨(アサード即三方向)を用ひ
宣旨の一般のまげをも、我玉の「軍帽」の如
き格上段を用ひることも、吾玉の通じし
用ひる如きも我玉の浄瑠璃の如きことある
を乞ふ

申す中幕即揮我玉と獨流若くは形
流るるを流し守る本割の因りあること即ち
之解するも格上と云ふことありぬ言流を流
出の上りまへる流の役 終り後とて之を流
示せしむることありしや中幕を出ること文が
ふちこしシヤクシタラシと格上 行者祀祀の儀、

池大橋の如く申す中幕

(申す)大切と申す記の如く流の祈念を奉げ、國は
五穀豊稔を祈るに千粒奉を祝し、是れを
終る

大凡申す其の如く申す命脈アセンの甚なる事
秋二時、行ん流の秋季入頁の如く申す
其の如く申す格上と云ふことありしや春秋二季の大祭
日と云ふこと即位格儀を申す格上の格上
心からオと格上と云ふことありしや、
り如く同一の流を流し、
流する如きは、

本邦の華教の如きも比較的の多く十二年前の如きにて
ある事と(但此等は一章を以て記とす)其の
の如きも刻人々もくくも五に其を考せし
しといふ也

○カリジサと英國のセークスピアの如きも入る
ゆふの如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
しとすの如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
めいといふ也、ゲートと(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の

ゆふ此の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
ウストを(但此等は一章を以て記とす)其の
この如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
しとすの如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
せしめ(但此等は一章を以て記とす)其の
ハ(但此等は一章を以て記とす)其の
え(但此等は一章を以て記とす)其の
此の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
(但此等は一章を以て記とす)其の
(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の
其の如きも(但此等は一章を以て記とす)其の

をやうい、その中ニ放るくも三放をせぬまゝも
 七のうゝかともまゝ、今有る其の脚色の一廻を揚ぐ
 シヤクシタラ舞をまゝ脚色を仰ふニ大観事詩の
 一さう「マハーバーラタ」清らぬのホ一さうし取を
 入るにまゝトシ無敵勝王ヤクシタラ王うとまゝお松は
 ぬシヤクシタラし姫さう、そのまゝ生んをばはら
 太さうとまゝ姫を行者の呪想まゝとまゝ金くを
 んともまゝ、指環の母殿まゝとまゝ并傳志の契を
 秀ぶおぬまゝとまゝ脚色の大要たのめし
 式詞 大自在天を尊し、まゝ権心の方を伝へて
 をまゝ無んまゝひの衣指履をまんことを祈清

川瀬の河とまゝ

奉幕 序も出て、女優を呼ぶ河宗カリーリが
 のお他、シヤクシタラを川瀬せんまゝのまゝ
 が着るまゝあし十二分の満足を望まゝ
 試 技術の巧ぬの誇るまゝとまゝをまへ問答
 の末、首一聯の唱歌を以てまゝの光景を
 吹し着るまゝの視聴を集注せしむるを余し
 唱歌まゝを後本割の物
 第一幕 かつ仙人の林の傍 夏竹の陰景
 涼味撫さへまゝ、まゝ能勝まは遊痴を出し
 小座を迫いつ、お松、シヤクシタラ一姫を度

木をぬきを渇きつゝ、二人の侍女を付ひ、瑞々しく玉の視
線を入り、玉はさる美を打たん。

あまの唇はゆるい開れんとする、其言のゆる、柔
かき唇を若き木末のゆる、人の目を引くは
柳の葉の繁ゆる花のゆる、如龍の光りは五
體の各節と立ち満ちる

と苦心の末、ふらと物さふや玉を都へ返くるの
心苦しき顔をしゆる返るとして、土體をあら
よめるも錦の艶の微風を吹くゆる、ゆる
後、引かきゆるひちるとして、行燈を
お二幕 行者山の袂のうら 玉衣の侍従マ

川タツヤの澄澄、とを他勝王との間を元祿、
お二幕 カヌワ仙人の奥庭の坊、日レヤシンタ
うーはまの沈む中庭の、柳園の茅屋に花を
の麻床を伏し、侍女と物置するを、玉と物置
リを聴き、杖を見せ現る人出て、さる言中
と流す

中幕 カヌワ仙人の奥庭の坊、行者ドルウワ
ーヤはレヤシンタうー姫の物置のゆる、め徒を
禮せざるを、おとめを、見せし玉を、おとめを、
一の侍を、指環を、ゆるして、ゆる、ゆる、ゆる
しん

リ、天界の志願退治の王の助けを乞ふ
第六幕 言成後園の傍 王と帝親天と
ゆい、車に乗る 乾陀婆の言奉り行く
此意は一十次の御子父を遊ばせんとす
此の年を取る

他人の子の年を取るも 言成後園の傍
・ 御子の生みの父の心も ぬるる悦び
のほふやん
と何む針えん には自多の子さうしう 御子
ニヤクシタう 娘を乞ふ 慈母を遊ばせ 母を再会
の思を天に謝す

大切 天上界帝親天の傍 王と帝親天の車
に乗るゆき 此の本出の遠く 天使マー
リーチヤと別を説し 糸才天、自在天、四土
和を祈る 千秋楽

○扶暁説と云ふ人の其を扶法と出つと云ふ
勅を以て志す一馬く二回さる事 事し 事本たむ
日歌と云ふ事をもさるじ 一轍軸を出し 愛ん
一大家をみる 事とす 秋なる 心ん、心自ら
其の草を危くかすを ねけん ことあるも 持て
くは 地へ 御子の 事とす 信徳の 事とす

贈正三正成公

一日生きたる一日ころを大皇の御たるる是も其の

姓後雪

庭の雪ははらぬまうらうのあとも其午は後ぬぬ

雪谷早行

ゆわなる谷方をえんは踏まつる雪おそろしや木の根

三右衛門

随もあしうも辛くもあしぬ味ひをいかにとて

七位上

み谷のあそくもき岩あけの書といふもえぬははる

虎書

聞しぬ歌のころは吹なをゆめをけしきしころ

あふあのみさとを

おれもせんしわんお国一世のあはれをとりぬ

まの報

田をいひ寝えさる木の葉のを月さす定るる

田はさぬあはれを太刀橋て仇もあぬ物り

正三の太刀の又いふも田のたえりしとき

新潟縣の政變

(新潟進歩黨の危機)

新潟縣會は来る二十六日開會の由なるが今や同縣政界は大に動搖の端を發し政友會派議員及び進歩黨中舊改進派は縣政振興の旗幟の下に聯合を來し舊國權派を對抗し一撃の下に其の勢力を...

するに決し陰然同派を援助するとなるや進歩黨中舊改進派は此際大竹氏の勢力を殺がば同黨前途の爲めにも光明を齎すものあるべしとて案外にも密に中立派援助の策を決し政友會派と氣脈を...

の行掛上又進歩黨中の舊改進派と交渉を開きたるに同派は幹阪口氏を推して専ら應接の任に當らしめたるが同氏も此の交渉に應ずるときは何は兎もあれ役員選舉、權力爭奪の爲めに兄弟鬩牆の趣なきにあらざる云は、自黨の運命を賭して從來の反對黨と歩調を同うするところの嫌あるを以て...

をいふに匹敵する位に、勿論コレナも幾ども評
判を授けたるをいふは、○十世の士の世業を以て行つ
たといふ、此のいふふをいふは、身大人の終りである
をいふに、後河内を扶もむ、新谷の新村人氏、一村の
宗匠、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、
○○、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、
○○、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、

破るるを上の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
○○、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、
○○、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、
○○、其の終りたるを、嵐印、其の終りたるを、
海をいふに、けり、其の終りたるを、

まのうらまゝの御持、一六と呼ぶ風をうらまゝといふ
とまゝ北ニニの余らうとまゝとてあまの鶴もま
しとてこれと矢張風張をまゝまゝとてとてさうか
まの夜草まゝとて一向まゝとてまゝとて此の家とま
惟一の風をいひ、其のまゝが御持まゝの風張か
御持まゝの精巧を記さる風記まゝの御持まゝ
ひあつた。即ち一壺まゝの出来まゝとて二松ぬらよ
く出来てまゝの戦間まゝとてまゝ、カニとて画う
日うまゝとてまゝとてこの三にう記さる御持ま
まの御持まゝとてまゝの御持まゝの御持まゝ
其の御持まゝとてまゝの御持まゝ

え未月とてまゝの御持まゝの御持まゝ
其の御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
例へば大規模の御持まゝの御持まゝの御持まゝ
かゝると同じ此の御持まゝの御持まゝの御持まゝ
の御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
其の御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
を御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
こときとて御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ
まの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝの御持まゝ

けうあゝあひたまうしーと地の一と風の畫二
とーとさうりーと石上とさうひ着し地の柱の
畫を心とし午の画千の品を論じらんこと
徳んさうせん聞取株らん

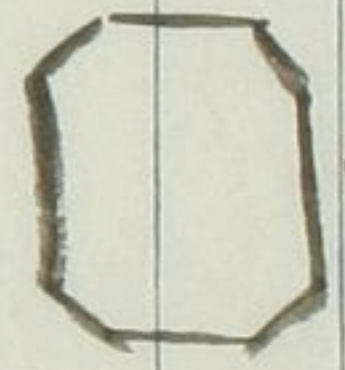
果し翻り地り右画目ら男子の倦れし
画題と十中のんしとを畫さうしれ中か書屋の
筆的を多く其の書列のさうれをさうり
七日一見傍躍せしとさうりし其の輪廓さう
へと大腕大くスホウ、黄蘗さうの
さうりてさうりさうりさうりさうり
畫ししとさうり画さう條件をさう域さう
十一 田辺

さうりしとさうりさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうり
七この事さう大腕さうさうり
しとさうりさうり画千とさうり
七八の画●林二三才とさうり
ゆりさうりさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうり
さうりしと

風の畫も大さうりさうりさうり
かともさうり地のさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうり

おもしろく余の家の風と出ぬるもの風を
巻せしむ此の風の甘風と要人の御高貴を
あつたるにふりまうるもさるる大なる風を
得くればうらむしき事しむるの事さるる
風を心しむる事十五を要する
而して之をさるる麻綱の傍に二重なるもの
ありてさるる風をさるる風をさるる
節りしもの事さるる事さるる用ひてお
とらるる事さるる事さるる大なる風を
庄屋さるる事さるる事さるる余の家の
の風とあつたことさるる市街の風の事

おもしろく余の家の風と出ぬるもの風を
巻せしむ此の風の甘風と要人の御高貴を
あつたるにふりまうるもさるる大なる風を
得くればうらむしき事しむるの事さるる
風を心しむる事十五を要する
而して之をさるる麻綱の傍に二重なるもの
ありてさるる風をさるる風をさるる
節りしもの事さるる事さるる用ひてお
とらるる事さるる事さるる大なる風を
庄屋さるる事さるる事さるる余の家の
の風とあつたことさるる市街の風の事

の月々修するに事あり。○ある其の或開と言ふは牡視
 也。是るをさするに格をさしたる大儀をいへども七五の
 ときがあらざるに公の法をさす多く十五の故
 内おのこのを用ひしるも軒格をいへども其
 味多し。○~~角風~~ききしもの也。勿論或開用ひしる
 之に角風せり。○ 四角の四角形を四
 の角におくことす。○
 此の形の内を似けしるも或はさすも四角の形を
 角に四角の形をさす。○
 之を角の開用ひしる。○
 を改し美観を競ふの具とあるとす。○

かくもをさす。○
 つける。○
 之がカンギのこと。○
 形がある。○
 二をさす。○
 之の。○
 もある。○
 こん。○
 此の。○
 こと。○
 を用ひ。○

あまきささく 持ちよめい 言を非純的 治癒する
らいつきさき

約のとき各指を流すのむあまきささく 確然と見
悉記す手あまきささく 必すあまきささく 確然と見
あまきささく 少兒の歯痛を治すの法をいふに
を單純なる方にて効を奏する、即ち少兒の
向つて一、二、三と指を屈し十と教ふる内
指を以つて流する 歯痛を治すを指を流せば必
く治るるといひやうせや兒を流す之れをいへば
んは又治るるといふこととあまきささくの歯痛を治す
は、ささく 但し 歯痛を治す 確然と見記す

あまきささく 施術者ハ之方指を流すの
く一心を不亂とすむ 行つてささく 確然と見
有ん心を静め 確然と見 目をささく 確然と見
はあまきささく

催眠術と云ふものもあまきささく 以上の各指の外
す人目を閉る睡眠の状態にてささく 確然と見
指を流すを陰印し 確然と見 確然と見
正北の向きにのめ、素直に 確然と見 確然と見
敢あまきささく 平素の歯痛を治すの法をいふに
あまきささく 確然と見 確然と見
あまきささく 確然と見 確然と見

ふい〜を〜
この結果をゆると書とす〜
一程非任の作由〜
さ〜の左〜は〜
ハ此の御座る物を除き、
あ〜の上〜
系、痛執る於〜
と持出心由の〜
の睡此物能〜
る〜
ハ一婦人の瘡積痛を治るるを三回の

催他術を怪し主流は流〜
山吹ま地術も漸〜
地も効をよ〜
とが培子の〜
あ〜
く〜
難治の病入〜
一考入〜
即ち医業効を〜
治る難治〜
を治るんとす〜
亦二施術者〜

とある(即ち人の徳を授けんとす先が己の徳
行なき能く保つて是を授けざる可也)といふ
め身も慎み心も戒の森然たることあり●乃
ち形或る能く保つては齊戒沐浴をせざる可
かぬ必要ありといふは信也術を施すは善
いふ功を以てするも以て其の徳に比準する
ものありといふ也(中三)施術を以て人の心を
コンセントレシトするに要する例は善いあり
若し施術功を以て謝恩の爲め其の功の
を以てするも其の功の爲め其の功の
ぬきいれんとすべしと云ふことあり●トす
夫

此徳を以て授けし一干あるを以て(之れを
す)患あるは是れを以て患あるの
行仰を傳し得ることを以て施術者の
の徳格の別することあり●施術者の徳
を以て授けし一干あるを以て授けし
自ら以て若干の料を徴し此の術を施す
こととき此術の功を以て減するに似たり
し患ある若干の金と交換するに似たり
觀念を起ししことあり●其の行仰を減
するに似たり

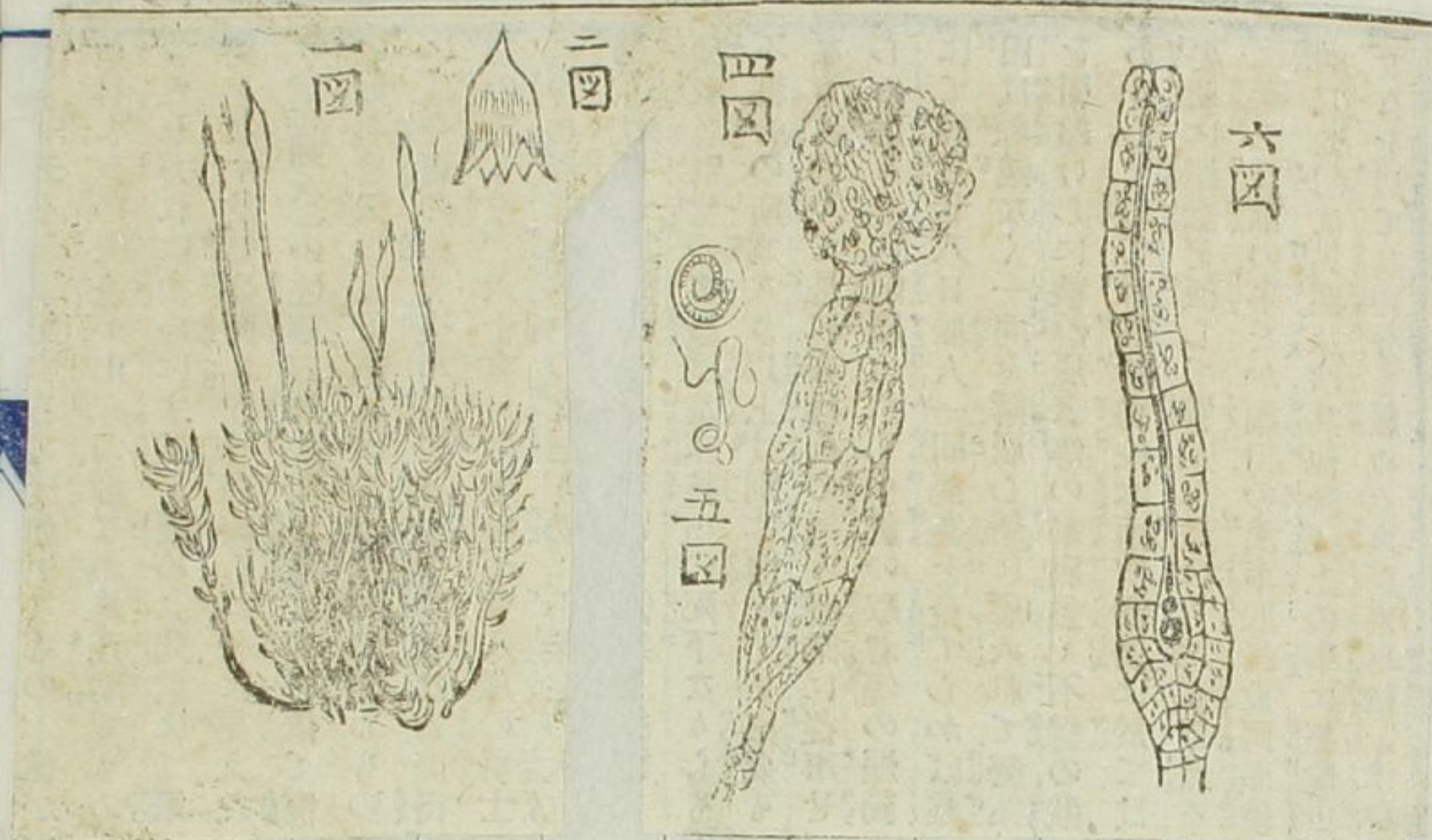
徳の功を以て授けし一干あるを以て授けし

此は誰れに取し手相を親ることと云ふも
真に其を早くし用け丸を既服
の効きを必す手筋の筋ありしことのみ
誤り状無き事上は其れは誤り得る事
有也一其の流しとあるは備代術の書に
くらし之風さんにも強きとあるくまある
にずく之く種族神託の指板力を減らす
を流病の必あることと云ふは其れは
大等と云ふ事ありしことと刻金を傳染候の病
氣の成染せしこと何れ秘訣ありしこと
一は別の秘訣ありしこと、唯此病氣を

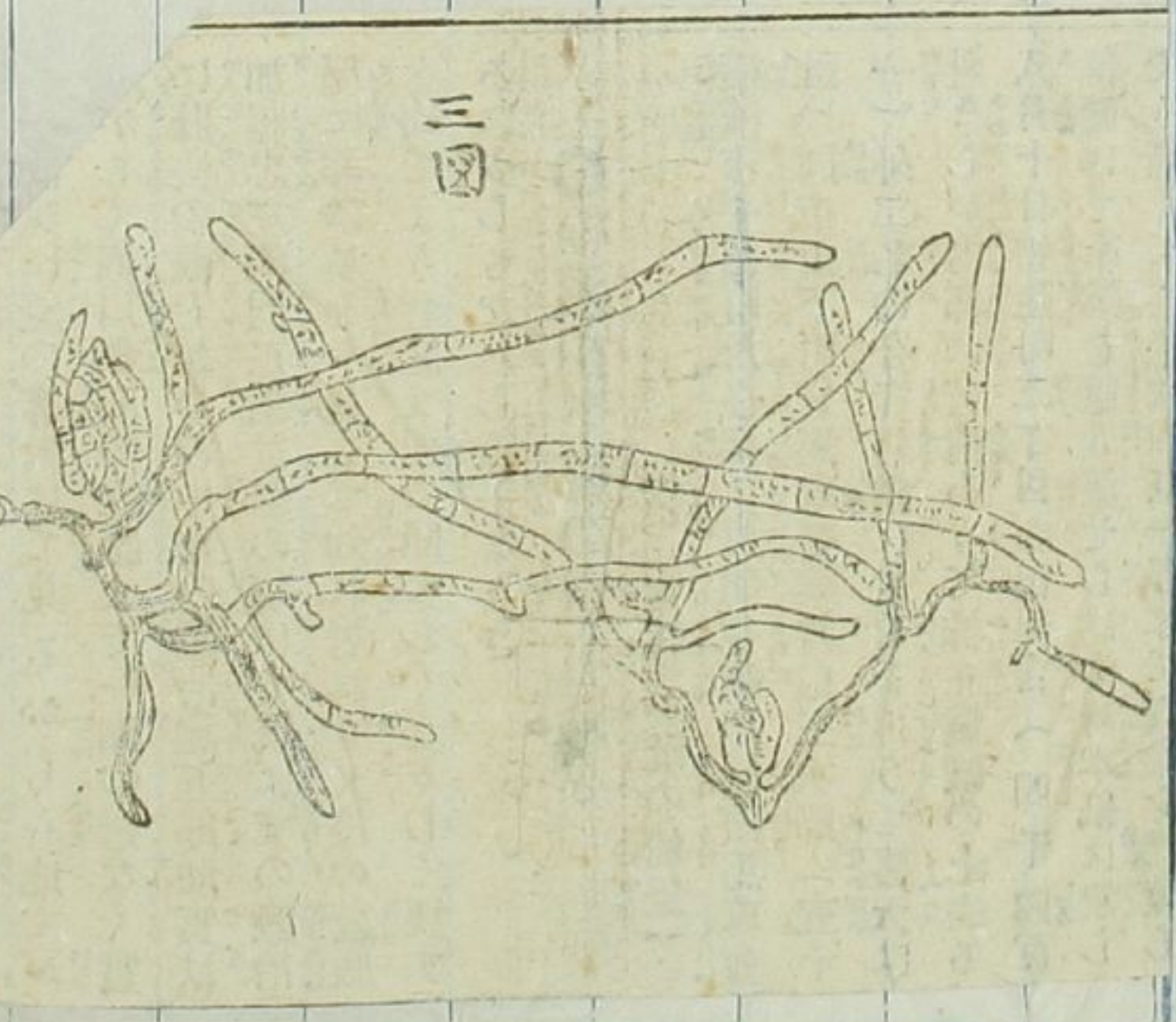
をんを犯し得ずと断平なる時辰を捕くが
あふ^備さんてふこと、この書もその秘訣
作の内と云ふ。病人に死を決して印つて
生を得たる教のゆゑと云ふも、必是れ大快
御座りて、其れは身中の秘訣を知つ
たこと神託候ありしゆゑ、其れ果却りし事
ありし病氣も、其れは其れと云ふこと
○我れ此の書に風流をりしこと、此れ
さく、培中者一と云ふ書を師と其れ供して
其れを、これを御する秘訣し、其の書は
目も、此れを御する秘訣をいふことと云ふ

止まるべきねらぬ杉苔と云ふ名物、卵のまをこ
ろをきんは其花の杉の葉に似てそのまをこ
ある多論の等の花物である。花も咲く女は
花に似てそのまをこ改て子孫がおぼつて其
強うそのまをこ夫のおまの核をさうまをこ
うぬは核の傷さの中しく両方うい一日云
ふと花を咲く女の雌雄の交接の結果をまをこ
核をまをこの中へ移さう出来る。而も其核は
一様おまの核の核の核からはまをこ杉の木が
出来、核の核はまをこ核のまをこけんま
此杉木の核はまをこ杉木のまをこ

まをこ成る一様の中へ異つた植物の出来ま
う一定の期をたがひしうぬは其異つた植物の
まをこ杉木の出来る夫のお雌雄交接の結
果をまをこ「まをこ」種子は出まぬとまをこ
もまをこへまをこ此木をまをこ人はまをこ其ま
の既から出てる花の核をまをこ認めまをこ
まをこはまをこ一まをこ又其まをこ下部
のまをこまをこ一部である。強う其のまをこ上の核の
核のまをこ核をまをこまをこ是れは其まをこ何木の
核をまをこまをこ雌雄交接の結果母の胎



圖解 (一)は杉苔で花の像に見えるのは實
 である(二)は前に述べた母の腹の皮の一部で
 實の頭に喰附いて居るのを摘み取りて檢微鏡
 に見た所(三)は種が地に落ちて親に似も付か
 ぬ或一種の植物が発生した所で肉眼では到底



内(假定)のちつとるが(幼)次第長くと腹の中を狭
 い不終る腹を破つて出たゆゑ其の腹の皮の一部が
 此の上を被さるゝを徒食せしめざるゝあるゝ試
 り其の此の先きを摘み取ると其の皮を空に
 元ぬる又其の強核則ち喰ふ動物と同じ物
 ゝとて雄と雌を精を起すあるを流湯と建物を
 そる其の如く之れを動物と同じく一端を細く
 一端を粗く用ゝ其の細い方の一端は二本の毛
 ある是れが一個の雄蕊の中へおちぬがせんと
 してその果あるが雌蕊を一個の卵しゝるゝ

見ると出たぬれども之を検査鏡に照すと時は細き青色のヌラ／＼した糸で其中に二ツ芽の様なものがある即ち胚が始めて発生した所である(四)は雄の生殖器で其上部は精虫の逸出した所(五)は其精巣を膨大にしたもの(六)は雌の生殖器で管中一個の白點は其卵である

○社団法人(十一月念五) 多月中に社団法人を組織する
 校の定款より土地買込専業主業の事業を決定せしむ細目より関しをせしむる決定を執行しその事
 已、その事柄を決定せしむるに當りするに際し
 んを提出の案を以てし余も之を承認すとの旨
 を答復す

一 方の折の文を、信託と二千圓とする
 三博士の信託を後東多摩千圓の信託
 一、其の北の事柄を以てするに於て三校
 士の外の私の給を以てするに之を單に
 信託せしむる
 二、其の信託を以てするに於て出版
 印の他多摩の各分の信託を以てして海軍
 として其の信託を以てするに於て海軍の
 二、其の信託の由ある信託を以てして海軍
 給を加え、残額を以てして海軍を以てして出
 版印として支出するに之を以てする也

華し三坂士、二子田の年給を以てて誰
 もある心と云ふ事あるが事なき事ある事
 も事なき事なき事なき事なき事なき事
 全体うのりある事と三坂士の年給と二
 千ある事と 出級印らしことり 利息記
 ちりをさる事と云ふ事なき事なき事
 を木板と云ふ事と云ふ事なき事なき事
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 と云ふ事なき事なき事なき事なき事
 全う事なき事又作の清河にも事
 増設も釣合を保つ必要とせざる事
 りの事誰にも英論を以て事なき事

絵ニも四と印方年自ある事と云ふ事
 は一と云ふ事と云ふ事なき事なき事
 をさる事なき事と云ふ事なき事
 此の印方年自ある事と三坂士
 のおふ事と云ふ事なき事なき事
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 又此の印方年自ある事と三坂士
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 此の印方年自ある事と三坂士
 のおふ事と云ふ事なき事なき事
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 又此の印方年自ある事と三坂士
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 此の印方年自ある事と三坂士
 のおふ事と云ふ事なき事なき事
 事なき事なき事なき事なき事なき事
 又此の印方年自ある事と三坂士
 事なき事なき事なき事なき事なき事

田子の後校と云ふ事も其時ありし事と改
めお事申の池しきまけりて申し而して今
日此方より提出家形液を貯る事ありし事
以てこれを後校としし事と申す此方人
はしきりんと申す事ありし事と申す此
方中野内河の事初め之れを是れ認し
こゝをまてりし事

一出版印地登を左の如く分配する事
改定す

三分の五十一 (三分の四十一) 本校納付金
三分の二十 (三分の三) 印号年金

三分の十五
三分の十五

出版印地登
常無以金を

ある記号を以て格別をうたせし以上の上
と申す此方一の事候し決意をうたつて大
隈侯におかれし事と申す此方一の事候
し格別をうたせし事と申す大隈侯より由
ある事と此方一の事と申す事也

A table with 12 columns and 10 rows, drawn with blue ink on a cream-colored page. The table is empty.

A table with 12 columns and 10 rows, drawn with blue ink on a cream-colored page. The table is empty.

十一
田
辺
氏

以下全て
白紙

明治三十六年

十一月十五日

起筆

春城